

新訂版

精説世界史

京都大学教授・文博・前川貞次郎著

数研出版



初 版
第1刷 昭和37年2月1日 発行
第12刷 昭和42年9月20日 発行
新訂版
第1刷 昭和43年3月1日 発行

新 訂 版

精 説 世 界 史

定価 580 円

〔著者との協定に
より検印を廃止〕

編著者 前川貞次郎

発行者 星野 剛

発行所 **数研出版株式会社**

東京都千代田区九段北一丁目12-11

電話 代表(265)0811 振替 東京118431

京都市中京区富小路二条上ル

電話 (231)0161〜2・7246 振替 京都4325

福岡市天神4丁目 サンビル

電話 (74)1010・7161 振替 福岡20855

印刷 株式会社 文功社

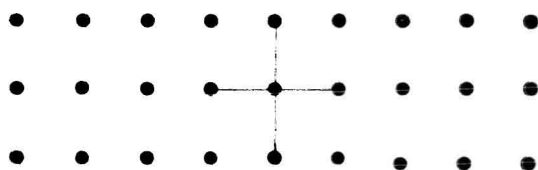
製本 十幸製本所

乱丁本・落丁本はお取り替えます。小社またはお買上書店まで

新訂版

精 說 世界史

京都大学教授・文博・前川貞次郎著



数研出版



I 文明の成立と古代国家の発展

§ 1 先史の世界	14
1. 人類の出現と進歩	14
2. 原始人の生活と文化	15
§ 2 文明の成立	20
1. エジプト	20
2. メソポタミア	22
3. 東地中海沿岸の諸国	25
4. オリエンツの文化	27
5. インドの原始文明	29
6. 中国の原始文明	30
7. アメリカの原始文明	31
* エジプト史	33
§ 3 ギリシア世界	34
1. エーゲ文明	34
2. ギリシア世界の成立	36
3. ボリスの盛衰	37
4. ヘレニズム世界の成立	42
* イタリア史	49
§ 4 ローマ世界	50
1. ローマ共和政	50
2. 地中海世界の成立と共和政の危機	52
3. ローマ帝国	55
4. ローマ文化	58
5. キリスト教の成立と発展	60
§ 5 アジアの古典文明	62
1. インド古代文明の発達	62
2. 中国古代文明の成立	68
3. 中国古代帝国の形成	72

II 中国社会の展開とイスラム世界の成立

§ 6 東アジア文化圏の成立	84
1. 魏晉南北朝時代	84
2. 隋唐世界帝国	90
3. 帝国の動揺	92
4. 東アジア文化圏の形成	95

4 目 次

§ 7 イスラム世界の成立	100
1. ヘレニズム時代以後の西アジア	100
2. サラセン帝国の発展	102
3. イスラム圏の拡大とトルコ民族の活動	106
* 中国史	109
§ 8 中国社会の変化	110
1. 五代の分裂と宋の統一	110
2. 金の興起と宋の南渡	114
3. 宋代の社会と文化	116
* インド史・朝鮮史	119
§ 9 蒙古帝国	120
1. 蒙古帝国と元の中国支配	120
2. 東西交通の発達と元代の文化	124
3. イスラム世界の情勢	126

III ヨーロッパ封建社会

§ 10 ヨーロッパ世界の形成	132
1. ゲルマン民族の大移動	132
2. フランク王国の発展	135
3. 封建国家の成立	136
4. ローマ=カトリック教会の発展	139
5. 東ローマ帝国の盛衰(ビザンツ帝国)	143
§ 11 ヨーロッパ封建社会	146
1. 封建制度の発展	146
2. 荘園制度の発展	148
3. 中世都市の成立	150
4. 中世文化	152
§ 12 ヨーロッパ封建社会の変質	156
1. 十字軍とその影響	156
2. 荘園制度とギルドの崩壊	158
3. ローマ教皇権の衰退	162
4. 中央集権国家の成立	164
* イギリス史	173
* ドイツ史・ロシア史	174

IV 市民社会の成立

§ 13 ルネサンス	176
1. イタリアのルネサンス	176
2. 西ヨーロッパのルネサンス	176

3. 科学精神の発展	182
4. 地理上の発見	183
§ 14 宗教改革と宗教戦争	186
1. 宗教改革の性格と原因	186
2. 改革運動の展開	187
3. 反宗教改革と宗教戦争	191
* イベリア半島史	195
§ 15 ヨーロッパの絶対王政	196
1. 絶対王政の構造	196
2. スペインとオランダ	198
3. イギリス	201
4. フランス	203
5. ドイツ・プロシアとオーストリア	206
6. ロシアと北ヨーロッパ	210
§ 16 西ヨーロッパ諸国の植民活動	214
1. ポルトガルとスペイン	214
2. オランダとイギリスの抗争	215
3. フランスとイギリスの抗争	218
* ポーランド史	221
§ 17 イギリス立憲政治の発展	222
1. イギリス革命の社会的背景	222
2. イギリス革命(清教徒革命)	223
3. 議会政治の発展	225
§ 18 アメリカ独立革命	228
1. 独立革命の原因	228
2. 独立戦争と合衆国の成立	230
* オランダ史	233
§ 19 17・18世紀の文化	234
1. 自然科学と哲学	234
2. 政治・経済学説と啓蒙思想	236
3. 文学と美術	239
* アメリカ史	246

V アジアにおける専制国家の展開

§ 20 中国社会の盛熱—明	248
1. 明朝の成立	248
2. 北虜南倭と明の滅亡	250
3. 明の社会と文化	252
§ 21 中国社会の成熟—清	254
1. 清朝の成立の発展	254

2. 清朝の中国支配	256
3. 清代の社会経済	258
4. 清代の文化	259
§ 22 ムガル帝国とオスマン=トルコ帝国	262
1. ムガル帝国とインド=イスラム文化	264
2. オスマン帝国の興亡	265
VI 市民社会の発展	
§ 23 フランス革命とナポレオン	272
1. 革命の原因と開始	272
2. 革命の展開	274
3. ナポレオンの支配	277
§ 24 産業革命	282
1. イギリスの産業革命	282
2. 産業革命の影響	285
* バルカン・小アジア史	287
§ 25 ウィーン体制とその解体	288
1. ウィーン体制の成立	288
2. ウィーン体制の破綻	291
3. ウィーン体制の解体	294
* 東南アジア史	297
§ 26 国民国家の発展	298
1. イギリスの繁栄—ビクトリア時代—	298
2. フランス民主政の発展	302
3. イタリアの統一	304
4. ドイツの統一とドイツ帝国の発展	306
5. ロシアの改革と東方問題	310
6. 19世紀のヨーロッパ国際関係	314
7. アメリカ合衆国の発展	317
* 中央アジア史	321
§ 27 19世紀のヨーロッパ文化	322
1. 自然科学の発展	322
2. 文学・美術の展開	325
3. 人文科学・社会科学の発展	330
4. 国際協調の展開	334
§ 28 ヨーロッパ勢力のアジア進出	336
1. ヨーロッパ勢力と中国の対立	336
2. 中国の屈服	338
3. イギリスのインド支配	342
4. 列強の東南アジア経営	343

5. イスラム諸国の衰退	345
--------------	-----

VII 列強の世界政策とアジアの近代化

§ 29 列強の世界政策	352
1. 列強の国内事情	352
2. 世界政策の展開	358
3. 帝国主義下のアジア	360
§ 30 第1次世界大戦とロシア革命	364
1. 国際対立の激化	364
2. 第1次世界大戦	367
3. ロシア革命	371
* 太平洋地域史・中南米史	373
§ 31 ベルサイユ体制下の欧米	374
1. ベルサイユ体制の成立	374
2. 国際協力の展開	377
3. 列強の国内事情	380
4. ソビエト連邦の発展	386
§ 32 アジアの近代化	390
1. 辛亥革命と中華民国の成立	390
2. インドの独立運動	395
3. イスラム圏の民族運動	396
4. 東南アジアの民族的自覚	398

VIII 現代の世界

§ 33 全体主義と第2次世界大戦	404
1. 世界恐慌とその対策	404
2. 全体主義の台頭	407
3. 国際対立の激化—ベルサイユ体制の解体—	410
4. 第2次世界大戦	416
* アフリカ史	421
§ 34 第2次世界大戦後の世界	422
1. 世界平和の再建	422
2. 2つの世界の対立	425
3. 平和共存への動き	429
4. アジア・アフリカの独立	432
5. 戦後の欧米諸国	439
6. 最近の国際情勢—われわれの時代—	443
7. 現代の文化	445

地 図 目 次

古代エジプト	20	ゲルマン民族の移動	133	イタリアの統一	304
メソポタミア	23	チャールズ大帝の帝国	136	関税同盟とドイツの統一	307
ペルシア帝国	24	フランク王国の分裂	137	バルカンにおける列強の対立	313
東地中海沿岸	26	ノルマン人の侵入	138	アメリカ領土の拡大	318
インダス文明圏	29	東ローマ帝国	144	フロンチアの西進	318
黄河文明圏	30	中世の大学	153	南北戦争時のアメリカ	319
アメリカ原始文明	31	十字軍の進路	157	ロシアの東方進出	337
エーゲ世界	34	中世の商業路	159	太平天国運動	339
ギリシア人の移住	36	フランス内のイギリス領	164	インドの英領化	342
ギリシア人の植民	38	百年戦争時のフランス	166	列強のアジア進出	344
ペルシア戦争	41	ムーア人の駆逐	168	アメリカの太平洋進出	357
アレクサンダーの東征	43	15世紀初めの東ヨーロッパ	169	アフリカ分割	358
古代のイタリア半島	50	ルネサンス時代のイタリア	177	イランにおけるイギリスと	
ポエニ戦争	52	地理上の発見	185	ロシア	359
ローマ帝国の拡大	57	宗教改革時代のドイツ	189	アジアにおけるイギリス・	
古代のインド	62	新教の進出	190	ロシアの進出	361
マウルヤ朝の版図	65	ウェストファリア条約後の		列強の中国分割	362
クシャナ朝の版図	65	ヨーロッパ	194	バルカン戦争	366
グプタ朝とバルダーナ朝	67	太陽が没することのない帝国	199	大戦下のヨーロッパ	368
仏教の伝播	67	オランダの独立	200	ドイツ・オーストリアの分解	375
殷周時代の中国	68	プロシアの発展	207	近東・バルカンの領土変更	376
戦国時代の中国	70	ロシアの発展	212	第1次世界大戦による新興	
万里の長城	73	ポーランド分割	212	国家	376
武帝時代のアジア	74	16世紀中頃のヨーロッパ経済	215	世界経済ブロック	405
西域要図	78	アジアの列国植民地	216	ドイツ・イタリアの侵略	413
分裂時代の中国	85	北米におけるイギリス・フ		ABCD 包囲陣	418
隋代の運河	90	ランス・スペインの植民地	218	ヨーロッパにおける連合軍	
唐代のアジア	98	革命時代のイギリス	223	の反抗	419
バルチア	100	北米13植民地	228	ドイツ・オーストリアの分	
ササン朝ペルシア	101	明代のアジア	249	割占領	424
サラセン帝国の発展	102	倭寇侵略図	251	鉄のカーテン	426
製紙法の伝播	105	清朝の最大領土	255	ドイツ分割	426
セルジュク＝トルコ帝国	108	ムガル帝国	264	アメリカの対ソ包囲体制	429
五代十国の分裂	110	オスマン＝トルコ帝国の領域	267	インドとパキスタン	434
燕雲十六州	111	ナポレオンの大陸支配	279	現在の東南アジア	435
北宋の対外関係	112	イギリス産業革命と工業都市	285	第2次大戦後の中近東	437
南宋と金・西夏の関係	115	ウィーン会議後のヨーロッパ	289	アフリカの新興国	439
蒙古世界帝国	121	ラテン＝アメリカ諸国の独立	291	現代の西ヨーロッパ	441
チムール帝国	127	イギリス帝国	301		

本書の利用法

1.構成 本書は、学習に便利ように高等世界史Bの文部省指導要領にしたがい、Ⅷ編・34章から構成されている。各編のはじめに、その編であつかう時代の概説を述べ、数章から構成されている編全体の目標を理解できるよう配慮し、各章のはじめには、その章での問題点や留意すべき事項についての説明を加わえた。さらに各章をいくつかの節にわけ、各節には小見出しをたて、その節の叙述内容が一目でわかるようにした。

2.本文 本文の叙述はできるだけ簡約にし、重要と思われる語句は細ゴシック体で示し、本文の理解を深めるのに役立つよう **補足** **図版** **史料** など小活字の説明文を加わえた。

従来本文中に挿入されていた生没年代・在職年代・原綴などは、本文を読みやすくするため今回の改訂ではその語句の下に行間に入れた。その場合在職年代は、年代の頭に☆を付すことによって生没年代と区別してある。

補足 本文中の用語・事項をよりくわしく説明したもの、あるいは本文を理解する上で参考にしてもらいたい事項の説明。

図版 テーマ学習に役立つよう重要と思われる事項や主題を問答形式で二本ケイの枠マキの中に入れた。

史料 中ケイの枠マキの中に、本文の理解に役立つよう参考として掲げた。

その他、読者のまちがいがやすいと思われる点、注意すべき点は脚注に述べた。

3.図版 地図・図表・写真・囲み記事などを豊富に挿入し、学習参考書に潤いを持たせるとともに、本文の理解に役立つようにした。なお、これらの図版には他に類を見ない三色刷により、その効果を十分に生かして学習により一層の効果が上がるよう工夫してある。

4.章末・編末 章末には、重要語の整理が掲げられているので、復習する場合重要語に関連する事項を思いおこしながら、各自の理解を確かめるのに役立ててほしい。

編末には、その編で学んだ内容を簡潔に整理した「編末整理」を掲げた。

5.試験問題 学習効果を確認するために、最近の入試問題を挿入した。とくに各国史・地域史が選んであるので、問題を解くことによって各国史の整理も合せ行なってほしい。

6.索引 個々の歴史事象を正確かつ全体的に知るために、従来の索引より項目をさらに増やし、また項目をもっともくわしく説明してあるところについてはその頁を太字にし、索引の十分な活用に役立つようにした。

序

論

世界史の概念

世界史とは何かと問えば、〈世界の歴史〉〈人類の歴史〉と答えるであろう。しかし、一見わかりきっているようにみえるこの〈世界史〉というものも、よく考えてみるといろいろな問題をふくんでいる。

◆寄せ集め世界史 〈世界の歴史〉といっても、地球上には数多くの民族や人種や国家が存在していたし、また現在でも存在している。それらすべての国家・民族・人種は当然みなそれぞれの歴史をもっているから、〈世界史〉がそのすべてをふくまなければならないとすれば、世界史を書くことなどは、とうてい不可能に近い。なぜなら、その歴史が比較的よくわかっている国家や民族もあるが、よくわからないものもけっこう少なくないからである。また、たとえわかっているものだけを集めたとしても、そこになんらかの関連・統一がないならば、それは単なる寄せ集めの世界史にすぎない。諸民族の歴史とか万国史とかよばれるものは、いわばそのような各国史・民族史の寄せ集め世界史である（事実、いまでもこのような性格の世界史、とくに西ヨーロッパの諸民族の歴史を中心として、それに他の諸民族の歴史をときどき書き加えたにすぎないものが、世界史という名で呼ばれている）。

◆哲学的世界史 ところが、このような世界史とはちがって、哲学者たちが多く名づけている世界史、あるいは普遍史というものがある。この種の世界史は具体的な歴史事実の叙述というよりも、歴史的事実を素材として、人類の歴史の展開をなにか意味あるもの、ある目的に向かっての過程としてとらえようとするものである。たとえば、歴史を神の摂理の展開過程と考えるキリスト教的世界史、人間理性の進歩の姿としてみる啓蒙主義的世界史、あるいは自由の実現の過程としてとらえる世界史（たとえば哲学者ヘーゲルのいう世界史）などが、その代表的なものである。これらの世界史では、国家や民族の歴史がもつそれぞれの特殊な文化や性格は重視されず、むしろ人類全体、あるいは人間社会というものが対象となっている。だからそれは厳密に言えば、歴史というよりは哲学であり、世界史とよぶよりはやはり世界史の哲学と名づけた方がふさわしい。

◆われわれの世界史 しかし、われわれがここでいう世界史は、万国史とも、また哲学的世界史、あるいは人類史ともちがった歴史である。それはあくまで地球上に存在した、また存在している国家・民族の歴史——もちろんわれわれが知ることができる範囲内で——に立脚しつつも、それらの国家・民族の間にみられる共通性と相異性に着目して、いくつかの世界（文化圏）を考え、それらの世界の発展、世界と世界との関連に着目しつつ、1つの統一・関連のある世界にまでいたる過程を対象とするものである。したがってここではまず、地球上の国家や民族をいくつかの地域（文化圏）に分ける地域区分の設定が重要になる。

地域区分
(文化圏)

世界史の地域区分をどのように行なうか、どのような文化圏を設定するかについては、学者の間で多くの意見があっても一致していないが、それはすくなくとも地理学での地域区分と同じものではない（もちろん深い関係はあるが）。

◆3地域区分 しかし、世界史を理解するために、ふつうよく用いられている最も大きな地域区分は、ヨーロッパ地域（ヨーロッパ世界）・西アジア地域（オリエント・近東または西アジア世界）・東アジア地域（極東・東アジア世界）の3区分法であり、いずれも地理的にはユーラシア大陸にある地域である。もちろん、これらの地域の中に、さらにいくつかの文化圏が考えられる。この

世界史の3地域区分法は、それぞれの地域が、長い歴史によってつちかわれた共通の特色をもっていることから考えてもうなずける面をもっている。たとえばヨーロッパ地域では宗教としてはキリスト教が支配的で、文字を書く方向が左から右であるのに対し、西アジア地域ではイスラム教が共通で、文字は右から左へと書き、東アジア地域では仏教が優勢で、文字は上から下への縦書きである。

このような理由から世界史を3つの地域(世界)に分けて考えるのが適当であると思われるが、この中で、ヨーロッパ地域と東アジア地域については、その歴史がかなりわかっており、それぞれを1つの世界として歴史的にとりあつかうことができるが、西アジア地域の歴史に関しては、今日の研究水準からは、なおそれを1つの世界としてとりあげるまでにいたっていない。したがってわれわれは、西アジア世界の特殊性は十分みとめつつも、本書では、ヨーロッパ世界とアジア世界とに大きく2分し、西アジア世界は、この2つの世界に関連するかぎりにおいて、どちらかの世界の中でとりあつかうことにした。

補足 文字を書く方向 文字を書く方向は意外に強い伝統をもっているの、これを世界史の地域区分の基準とすることができる。しかしある地域に強い文化がおこると、これが他の地域に影響を与えて書きかたをかえることがある。たとえば

南アジア(インド)はもと左から右へ書いていたが、イスラムの影響で右から左へとかわったし、近世ヨーロッパ文化の影響をうけて、中国や日本でも左横書きが採用された。このように歴史の進展とともに地域区分も動揺をまねがれない。

時代区分

ところで世界史も歴史であるから、時代区分が当然必要になってくる。

本来、時代区分は、歴史を考えたり、研究したり、叙述したりする必要から設定されたものであって、けっして客観的に存在するものではない。だから時代区分の方法も古くからいろいろある。ギリシア人は金・銀・銅・英雄・鉄の5時代に区分し、キリスト教が強いつきには、4大帝国説がとられたりした。

◆3時代区分法 しかし、今日もっとも普通に用いられている時代区分は古代・中世・近代にわけける3時代区分法である。この区分法はルネサンス時代に生まれ(p.178)、17世紀のオランダの歴史家ケラリウスによって一般化されたといわれているが、それ以後今日にいたるまで最も便宜な区分法として広く用いられている。19世紀以後になると、現代あるいは最近世を加えて4区分法になったり、または古代・中世・近世のかわりに社会発展の段階として奴隷制・封建制・資本制とする区分法などもわが国では多く使用されている。しかしこれらの区分法も基本的には先の3区分法にもとづいていると考えてよい。

◆3区分法への批判 ところで、この3区分法は本来ヨーロッパ史の区分法であり、17世紀以後ヨーロッパ諸国の発展がいちじるしく、19世紀にはいわば世界の中心として優越的な地位をしめたので、その歴史の時代区分法が、世界史の、またどの国の歴史にもあてはまる普遍的な時代区分法であるかのように考えられて、たとえばヨーロッパ世界以外の世界の歴史、インド・中国・日本の歴史、さらに広くいわれる世界史の時代区分として採用されるにいった。しかし、歴史研究の進歩とともに、このような区分法をもってしては、ヨーロッパ史自体の正しい把握もできないとして、この区分法に対する批判が生まれてきたし、ましてヨーロッパ以外の世界の歴史の理解には、この区分法をそのまま適用することには、いろいろな問題があることが明らかになってきた。(しかし、この時代区分の問題は、なかなか困難な問題であるので、本書では、便宜上、文部省の指導要領によって、時代区分を行なった)

世界史上の 人種と民族

世界史には多くの人種や民族があらわれてくる。人種と民族とはしばしば混同されて用いられるが、人種は人類を生物学的に分類したもので、人種の成立は、ほぼ旧石器時代から新石器時代の移行期のころと考えられている。

◆人種 人種の区分は、だいたい体質によって行なわれており、大きく3つにわけられる。

1) コーカサス人種(またはヨーロッパ人種・白色人種)——ヨーロッパを中心に北アフリカ・西南アジアに住み、のち南北アメリカへも移住してひろがったもので、この人種はさらに北方型と地中海型にわけられる。

2) 蒙古人種(モンゴル人種・黄色人種)——アジアの大半に住み、一部はアメリカ=インディアンとなったもの。

3) ネグロ人種(黒色人種)——アフリカのサハラ砂漠以南に住むもの。

アーリア語族(インド=ヨーロッパ語族, インド=ゲルマン語族)

西方派 スラブ系——ロシア人, ポーランド人, ブルガリア人

チュートン系——イギリス人, ドイツ人, オランダ人, デンマーク人, スウェーデン人, ノルウェー人

ラテン系——イタリア人, フランス人, スペイン人, ポルトガル人

ギリシア系——ギリシア人

東方派 インド人, ペルシア人, (古代ヒッタイト人, カッシート人)

ハム語族——ベルベル人, (古代エジプト人)

セム語族——ヘブライ人, アラビア人, (古代アッシリア人, バビロニア人, フェニキア人, アラム人)

ウラル語族——フィンランド人, マジャール人, トエスニア人

アルタイ語族——トルコ人, 蒙古人, 満州人, 朝鮮人, 日本人?

シナ=チベット語族——漢人, ビルマ人, シヤム人, チベット人

マライ=ポリネシア語族——インドネシア人, マライ人, ポリネシア人

《第1表》世界の民族の言語による分類

◆民族・語族 人種に対して、民族とは、言語・風習などの歴史的所産のいくつかを共通にする人類集団であって、歴史の上で重要なのはいうまでもなく人種よりも民族である。民族がどのようにして形成されたかはむずかしい問題であるが、最も古くは新石器時代から金属器時代にかけてのころに成立したものと考えられている。今日では民族の区分は、言語の特色によって区分しているので(第1表参照)、民族というよりも語族という方が適切である。

補足 言語の類似性 民族を言語で区分すると、たとえばヨーロッパ人とインド人とが民族的に近い関係にあることがよくわかる。そのいくつかの例をあげておく。

	英 語	ドイツ語	フランス語	ラテン語	ギリシア語	古 代 ペルシア語	梵 語 (インド)
父	father	Vater	père	pater	patēr	pitar	pitar
母	mother	Mutter	mère	māter	mētēr	mātar	mātar
兄弟	brother	Bruder	frère	frāter	phrātēr	brātar	bhrātar

《第2表》各国語の比較

* アーリア語族・ハム語族・セム語族を合わせてコーカサス語族ともいう。



I 文明の成立と 古代国家の発展

概説

- ① 人類は直立歩行をはじめ、火・道具・言語の使用をおぼえて、他の動物より高度な共同社会を形成するようになるが、新石器時代になると農耕生産が開始されて、文明の基礎がつけられた。
- ② エジプト文明とメソポタミア文明は、互いに影響しあいながら、周辺の諸民族にも大きな刺激を与え、しだいに統一的な古代オリент世界を形成するようになった。とくに前7世紀のアッシリア帝国と前6世紀のペルシア帝国は、このオリент世界の統一に大きな意義をもっている。
- ③ インダス文明と中国文明とは、互いにほぼ独立して発展し、それぞれ南アジア文化圏、東アジア文化圏を形成し、独自の歴史や文化を生みだした。なお時代はかなりおくれるが、アメリカ大陸にも原始農耕を基礎とする一種の都市文明が存在した。
- ④ オリент文化とギリシア文化を媒介するのがエーゲ文明である。エーゲ文明はクレタ島を中心とするクレタ文明と、ギリシア本土のミケーネを中心とする後期のミケーネ文明の2段階に分かれるが、いずれも海上交易を基礎にしたものである。
- ⑤ ギリシア文化の中核をなすものはポリス(都市国家)である。なかでもアラネでは民主政が発展し、ペルシア戦争の勝利によって黄金時代を現出した。しかし、4世紀にはポリス間の対立・抗争、内部紛争が激化して衰退し、ギリシアは結局マケドニアに征服された。
- ⑥ アレクサンダー大王の東征によってギリシア文化とオリент文化が融合してヘレニズム文化が形成され、都市が繁栄したが、アレキサンダーの帝国もやがて分裂し、諸国が抗争し、結局ローマに征服された。
- ⑦ ポリスを基盤として生まれたギリシア文化は調和と均斉を重んじ、真理の探求、人間の価値の認識を重視し、ヘレニズム文化を通じて東西にひろまり、ヨーロッパ文化の源泉の1つとなった。
- ⑧ イタリア半島の都市国家ローマは、しだいに発展して半島を統一し、ポエニ戦争をへて、ついに地中海地域を統一する大帝国内まで発展した。しかし、西部と東部とでは多くの点で異質なものがあり、帝国分裂の素因となった。
- ⑨ ユダヤ教から生まれたキリスト教は、ローマ帝国の迫害にもかかわらずしだいに普及し、ついにローマの国教となり、ヨーロッパ文化形成の大きな原動力となった。
- ⑩ インドではアーリア人によって、バラモンを中心にカースト制をもつ社会と文化が形成されたが、やがて仏教がおこり、マウルヤ朝・クシャナ朝などの統一国家の出現によって栄えた。
- ⑪ 中国では殷王朝のあと周王朝のもとに封建制が発展したが、春秋戦国時代からの鉄器の使用によって産業が発達し、秦・漢の統一帝国が実現した。



§ 1 先 史 の 世 界

人類の過去は先史時代と歴史時代の2つに大別される。文字で書かれた記録で知ることのできるのが歴史時代で、それ以前は先史時代である。人類の文字の使用は古くても5000年まえぐらいなので、先史時代のほうがずっとながい。先史時代は主として人類学・地質学・考古学・民俗学などの研究対象である。考古学によれば、人類の使用する道具の性質から、人類の過去は石器時代(旧・新)と金属器時代(青銅器・鉄器)とに区分される。石器時代が主に先史時代である。また、地質学では、旧石器時代を^{こうしききだい}洪積世、新石器時代以降を^{しんしききだい}沖積世(現代)とする。

1 人類の出現と進歩

人類をギリギリのところで猿から区別するのは直立歩行である。人類進歩の根本原因もここにある。直立歩行のおかげで重い頭脳をささえることができたことから、精神活動がはじまるし、また、手が歩行から解放されたことは、道具の作製および使用を可能にした。

化石人類

先史世界の人類には、現代人につながる現生人類(^{*}ホモ・サピエンス)と、そうでない化石人類との2つの種類があり、いずれも洪積世に出現した。いまから1万年あまり前をさかいにして、地質学的には、洪積世と沖積世にわかれるが、洪積世は氷河時代ともいわれる。約100万年間に4回の氷(河)期があり、北半球の大部分は氷河におおわれた。各氷河期のあいだには気候の温暖な間氷期があった。

◆**人類の発生** 現在知られている最古の人類は、南・東アフリカの^{アフリカ}曙人類(^{Australopithecus}アウストラロピテカス、南の猿の意味、1924年発見)である。第1氷期(約100万年前)の存在と推定され、類人猿に似ているが、不完全ながらも直立歩行し、小石を加工した原始的な石器(^{いしき}礫石器)を道具にしていた。ただし、火と言語の使用を知っていたかどうかうたがわしい。

◆**直立猿人・北京猿人・ハイデルベルク人** つぎに登場するのは、第2間氷期(50~40万年)前のものと推定される、ジャワ島出土の直立猿人(^{Pithecanthropus erectus}ピテクアンthropus erectus、1891年発見)である。大たい骨の成長から判断すると、あきらかに直立歩行している。これとほぼ同時期のものと推定されるものに、中国の北京付近の周口店で見つかった北京猿人(^{Sinanthropus pekinensis}シナンthropus pekinensis、1927年発見)がある。頭骨の形をみると直立猿人よりは、やや進化しているらしく、火の使用はたしかで、言語をしゃべることもはじめていたと思われる。そのほか、これらの猿人とほぼ同時期と推定されるものに、南ドイツのハイデルベルク人(1907年発見)がある。下顎骨^{かど}だけしか出土してないが、ヨーロッパで発掘された最古の骨である。

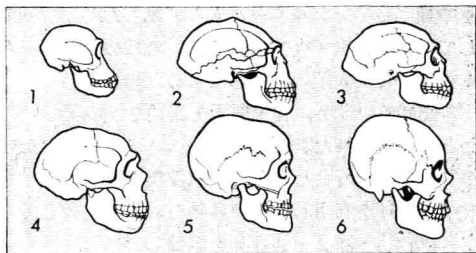
◆**ネアンデルタール人** 以上の人類の祖先はやがて絶滅し、

人類の脳髄容積

ゴリラ 600cc、曙人類 650cc、直立猿人 850cc、北京猿人 1000cc、ネアンデルタール人 1200cc、現代人 約1500cc。人類の進化とともに脳髄容積が大きくなっている。

* 化石によって生存が推定される人類で、古人類・原人類ともいわれる。

かわって第3間氷期(約10万年前)のころに登場したと思われるものに、ネアンデルタール人と総称されるものがある。^{Homo neanderthalensis}その化石は、ドイツのライン川下流域のネアンデルタール(1857年発見)のほか、ヨーロッパの大部分、西アジア・中央アジアなどに出土し、よく似たものは、南アフリカやジャワ島にもみられる。頭骨の形は、さきの猿人などと現生人類との中間型で、首を多少まえにだし、ひざをまげて歩行していた。また、これらの多くは洞穴に住み、石器や火を使用し、はじめて死者を埋葬する風習をもった。



《第1図》頭骨の比較

1. チンパンジー 2. 直立猿人 3. 北京人類
4. ネアンデルタール人 5. クロマニオン人 6. 現代人
脳髓の容量が大きくなるにつれて顔面角が直角に近づく

北京猿人 1923年北京郊外周口店付近の石灰岩洞穴から大臼歯が発見され、27年命名された。以後、10年にわたる大発掘の結果、43体の遺

骨がみつかった。たくさんの石器・化石獣骨が同時に出土し、石器と火の使用を知っていたことがわかった。第2次大戦中多くが所在不明になった。

現生人類

ネアンデルタール人が突然消滅したあとをうけて、最後の氷河期(第4氷期)が終わりに近づく5〜4万年前に、現生人類(ホモ・サピエンス)が出現した。現生人類の代表はクロマニオン人(1868年南フランスのドルドニー地方のクロマニオンで発見、以後、ヨーロッパ各地でみいだされた)で、現代人と体格のちがいはほとんどない。当時の気候はなお寒冷で、洞穴生活をつづけていたが、すでに精巧な石器や骨角器をもち、すぐれた彫刻や絵画を残すまでになっていた。

この段階では、人種の分化もあらわれはじめ、たとえば、グリマルディ人(仏・伊国境マントン近くのグリマルディ洞穴で発見)はネグロ人種、周口店上洞人(周口店山頂の洞穴で発見)はモンゴリア人種やメラネシア人種の特徴をもっているといわれる。

2 原始人の生活と文化

人類が外敵から自己をまもり、食料を獲得するには道具が必要だった。道具の進歩がそのまま原始人の生活と文化の発展だった。道具の材料はいろいろあるが、消滅しないで土中から発見されるものを基準にすると、その発展段階は石器時代と金属器時代に区分される。

旧石器時代

先にみた化石人類および現生人類の活躍した洪荒世は、そのまま旧石器時代にあたる。この時代は打製石器を使用したのが特色で、前・中・後の3期にわかれる。石器には、熔岩や石英質の礫石の一端をうち割っただけのもっとも原始的な礫石器、塊石のふちを両面から加工し、比較的大型で重量もある、握りつち形の石核石器、核石からはぎとった剥片を片面から修正した剥片石器の3種類がある。石核石器は樹木を伐採したり、土地を掘りおこすのに、剥片石器は毛皮をはぎ、肉を切り、骨をけずるのに適している。礫石器はまもなく消滅するが、前期には、石核石器と剥片石器が併存し、中後期になると、剥片石器系統のものが優勢になると考えられる。

◆前期 曙人類は別として、直立猿人・北京猿人・ハイデルベルク人の活動した時期である。比較的暖かい間氷期なので、人類は野外や河岸段丘に住居をもち、獲物や木の実を求めて移動し、家族的な共同生活を営んでいたと考えられる。